

研究分野	6 恵まれた漁場環境の維持・保全に関する技術開発	部 名	漁場保全部
研究課題名	(2) 県漁場環境保全方針に定める重点監視水域（大船渡湾・釜石湾）の環境に関する研究		
予算区分	県単（漁場保全総合対策事業費）		
試験研究実施年度・研究期間	令和元年度～令和5年度		
担当	（主）瀬川 勲（副）加賀 新之助、渡邊 志穂、多田 裕美子		
協力・分担関係	沿岸広域振興局水産部、大船渡水産振興センター、釜石市、大船渡市		

<目的>

釜石湾及び大船渡湾は、岩手県漁場環境保全方針に基づく重点監視水域に指定されている。これらの湾において、水産生物にとって良好な漁場環境を維持するため、水質及び底質・底生生物を調査し、漁場環境の長期的な変化を監視している。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災による津波で、両湾とも陸域から相当量の有機物等の流入、海底地形の変化・海底泥のかく乱等が生じたことで、湾内の養殖漁場環境が大きく変化した。また、両湾に設置された湾口防波堤は復旧工事により新たな構造となったことで、湾内の養殖漁場環境は今後も変化することが予想される。

そこで、湾内の漁場環境に影響を与える水質や底質をモニタリングし、その変化を漁業関係者に情報提供することにより適切な漁場管理を促す。

<試験研究方法>

1 水質調査

毎月1回、釜石湾（10地点：図1）及び大船渡湾（10地点：図2）において、水温、塩分、溶存酸素量、クロロフィルaの各項目について調査を行った。調査では多項目水質計（AAQ176-RINKO JFEアドバンテック）を用いて観測を行った。St. 1～6（釜石湾においてはSt. 1～4）では、透明度観測のほか採水も行った。採水した試水は200mLをWhatman GF/Fフィルターで吸引濾過しDMFで溶媒抽出した後に蛍光光度計（10-AU TURNER DESIGNS）でクロロフィルaを測定し、多項目水質計の補正值に用いた。また、表層（0m）、2.5m、10m及び底層（海底から1m上）について連続流れ分析法により栄養塩（硝酸態・亜硝酸態窒素）濃度を測定した。大船渡湾のSt. 1については水深が10m未満のため、10m層は未採水とした。

2 底質・底生生物調査

10月14日に釜石湾（St. 1～4）、10月8日に大船渡湾（St. 1～6）の各地点において、20cm角のエクマンバージ採泥器を用いて底泥を採取した。採取した底泥の表層（深さ2cm程度）から理化学分析用の試料を分取し、保冷して実験室に搬入した。残りの底泥は1mm目合いのフルイ上に移し、海水で泥を洗い流しながらフルイ上に残ったものをポリ瓶に移し入れ、中性ホルマリンの濃度が約10%となるように添加して底生生物同定用の試料とした。なお、底泥を採取する前には海底直上1m層で、多項目水質計を用いて溶存酸素量を測定した。

理化学分析は、全硫化物（TS）、化学的酸素要求量（COD）及び粒度組成の各項目について行った。分析法は水質汚濁調査指針（日本水産資源保護協会編1980）及び漁場保全対策推進事業調査指針（水産庁1997）に基づき、TSは検知管法、CODはアルカリ性過マンガン酸カリウム法、粒度組成は目合いが2、1、0.5、0.25、0.125及び0.063mmのフルイを用いた湿式フルイ分け法による。底生生物は種類別個体数及び湿重量を調べ、汚染指標種の出現状況、Shannon-Wienerの多様度指数（H'）を算出した。なお、底生生物の分類・同定は外部委託した。

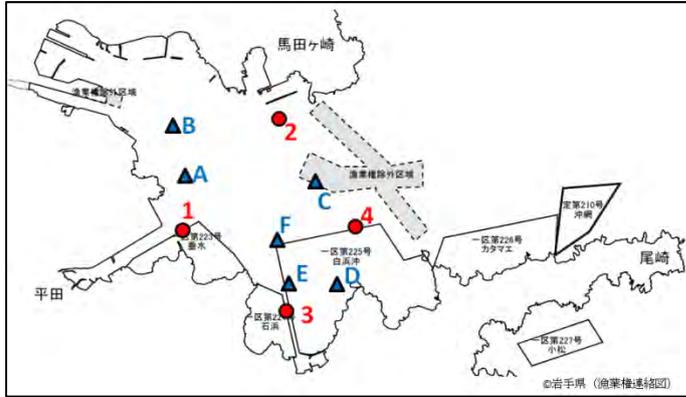


図1 釜石湾の調査定点

※St. 1～4 (○) では0mから海底上1mの水質の観測に加え、透明度の測定や採水を行った。St.A～F (△) では0mから水深15mまでの水質を観測した。

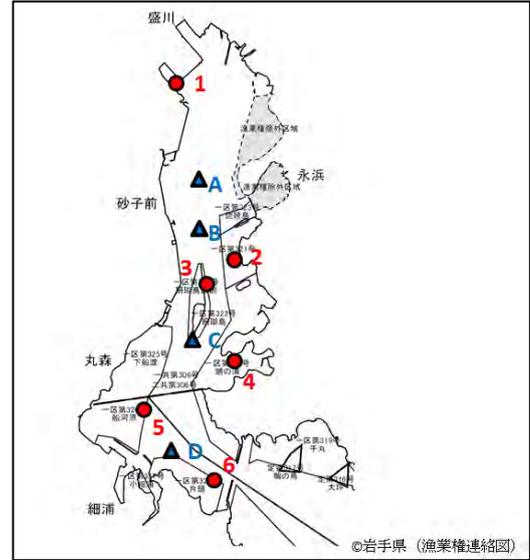


図2 大船渡湾の調査定点

※St. 1～6 (○) では0mから海底上1mの水質の観測に加え、透明度の測定や採水を行った。St.A～D (△) では0mから水深15mまでの水質を観測した。

<結果の概要・要約>

1 水質調査結果

令和2年度の釜石湾及び大船渡湾の水質調査結果概要を表1に示す。概要は表のとおり。

	釜石湾	大船渡湾
水温	<p>全ての定点において4～5月の5m以深の水温が2013～2019年の平均値(以下、「過去平均値」と記す)よりも2℃程度高くなった。8月を除いて6～2月までは過去平均値と同程度の値となった。8月及び3月は過去平均値よりも2℃程度高くなった。</p> <p>※図3参照</p>	<p>全ての定点において4～8月の表層(0.5m層)の水温が2013～2019年の平均値(以下、「過去平均値」と記す)と同程度の値となった。これまでは9月以降に表層の水温が低下していくことが多かったが、2020年は9月が年間の最大水温となった(4点の平均で25.8℃)。10月以降はほぼ過去平均値と同じような値で水温が低下していった。</p> <p>2.5m以深では7月及び8月に全ての点で過去平均値よりも2℃程度低くなり、9月に最大水温となった。</p> <p>※図4参照</p>
塩分	<p>表層(0.5m層)では降雨の後に塩分が低くなることがあったが、5m以深では塩分が大きく下がることはなかった。</p> <p>5m以深では、年間で最も塩分が低くなった時は33.0だった。</p>	<p>表層(0.5m層)の塩分は7月あるいは8月に年間で最も低くなった。6点で最も低くなったのは、8月のSt. 1で18.4だった。</p> <p>2.5m以深では、年間で最も塩分が低くなったのは6月のSt. 1で31.7だった。</p>

<p>溶存酸素量</p>	<p>水温が高くなる時期に溶存酸素量が低くなった。海底付近ではこの傾向が顕著であり、水深が50mを超えるSt.4では9月及び10月に水産用水基準(4.3mg/L)を下回った(9月:4.0mg/L、10月:3.2mg/L)。 ※図5参照</p>	<p>水温が高くなる時期に溶存酸素量が低くなった。海底付近ではこの傾向が顕著であり、St.1の9月及び10月(9月:3.1mg/L、10月:2.5mg/L)、St.3の9月(3.1mg/L)、St.5の9月(4.2mg/L)、St.6の9月(3.9mg/L)に水産用水基準(4.3mg/L)を下回った。 ※図6参照</p>
<p>クロロフィルa</p>	<p>2.5m層では、St.1は7月(5.0μg/L)、St.2~4は12月に年間で最も高くなった(4.9~6.4μg/L)。 10m層では、全点で3月に年間で最も高くなった(8.1~13.2μg/L)。</p>	<p>2.5m層では8~10月にクロロフィルa濃度が年間で最も高くなる点が多かった。この時、St.1の9月が最も高くなった(15.5μg/L)。 10m層ではSt.2~4で3月に年間で最も高い値となり、St.2が最も高くなった(7.7μg/L)。St.5及び6は5月に最も高くなった(St.5:5.6μg/L、St.6:4.9μg/L)。</p>
<p>栄養塩</p>	<p>9月あるいは10月に全ての定点で0mの栄養塩濃度が年間で最も高くなった(年間の最大値:193~416μg/L)。 12~2月は、表層から底層までの栄養塩濃度がほぼ同じとなった(平均:12月;43μg/L、1月;68μg/L、2月;71μg/L)。</p>	<p>St.1を除いた全ての定点で7月の表層の栄養塩濃度が年間で最も高くなった(124~212μg/L)。 12~2月は表層から底層までの栄養塩濃度がほぼ一定となった(平均:12月;64μg/L、1月;60μg/L、2月;56μg/L)。</p>

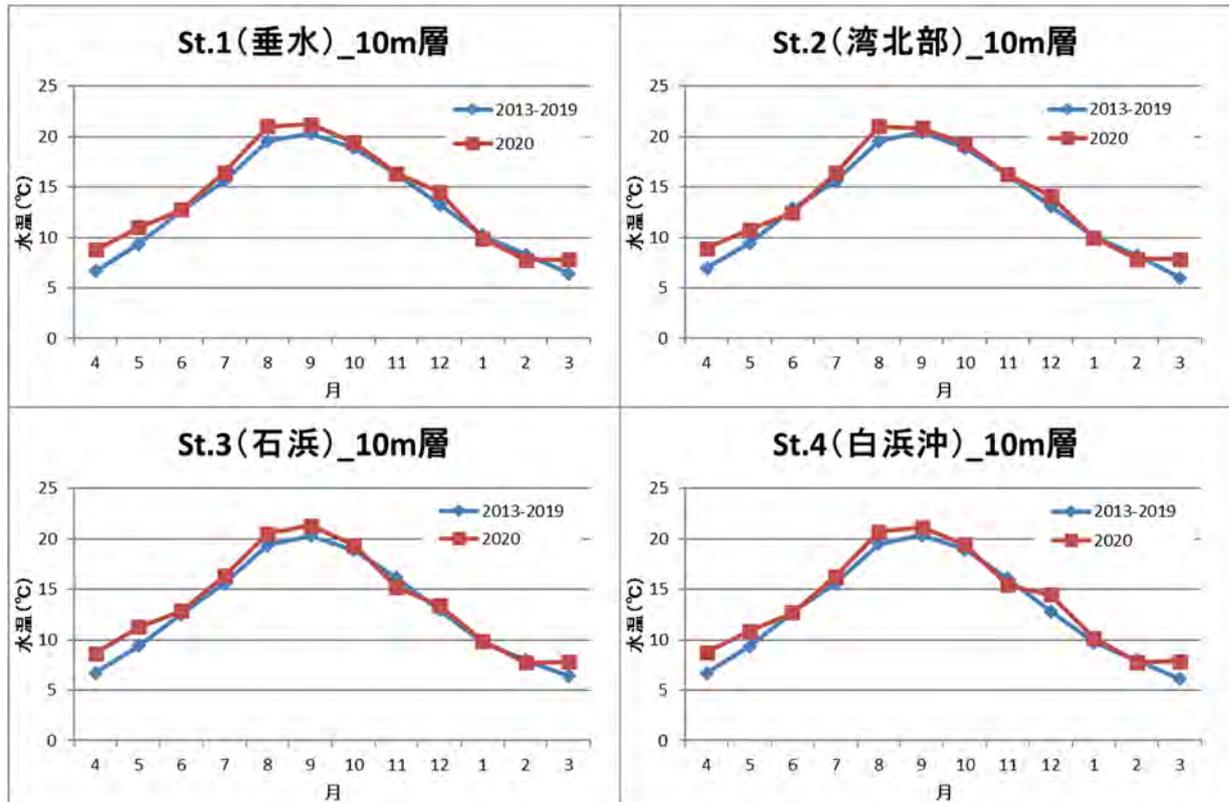


図3 釜石湾10m層の水温の推移

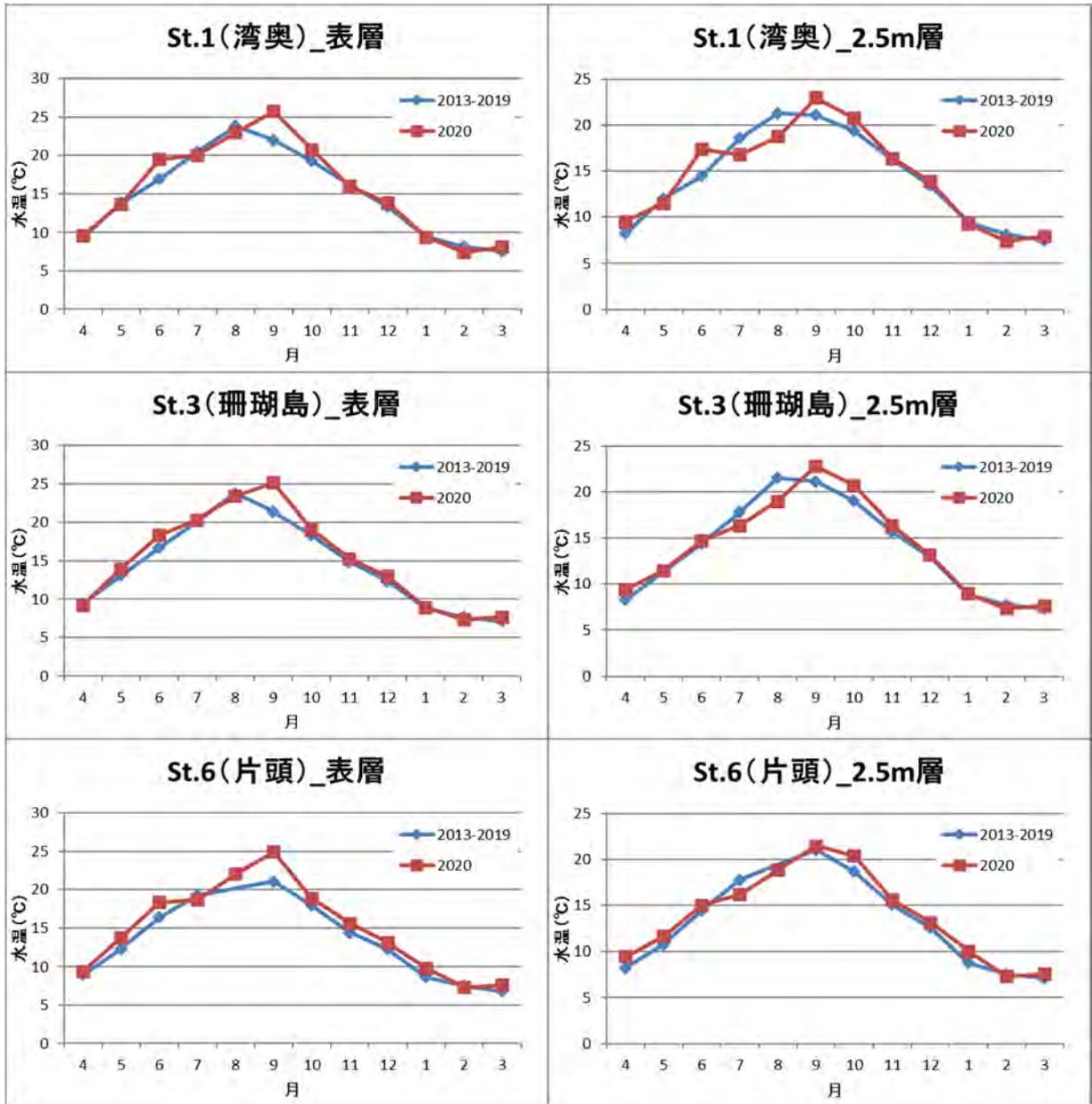


図4 大船渡湾表層及び2.5m層の水温の推移

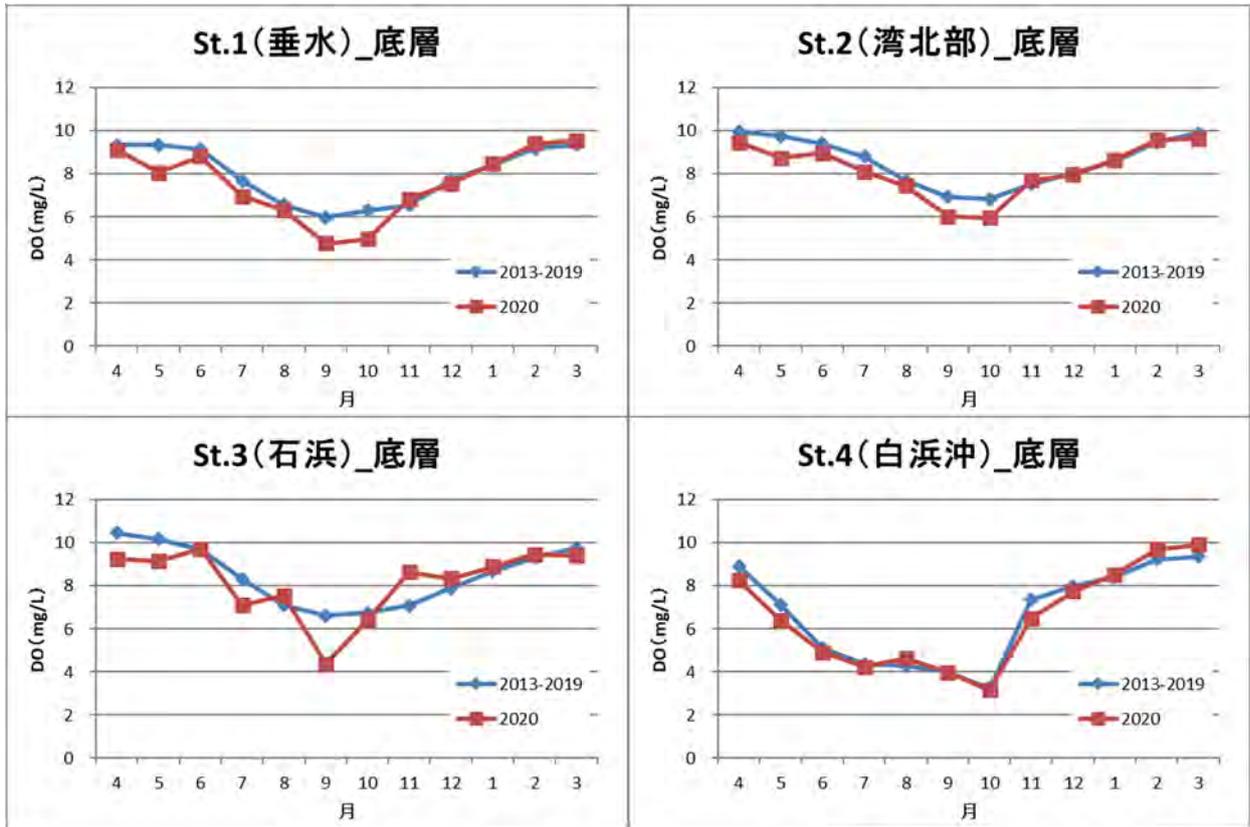


図5 釜石湾底層 (海底1m上) の溶存酸素量の推移

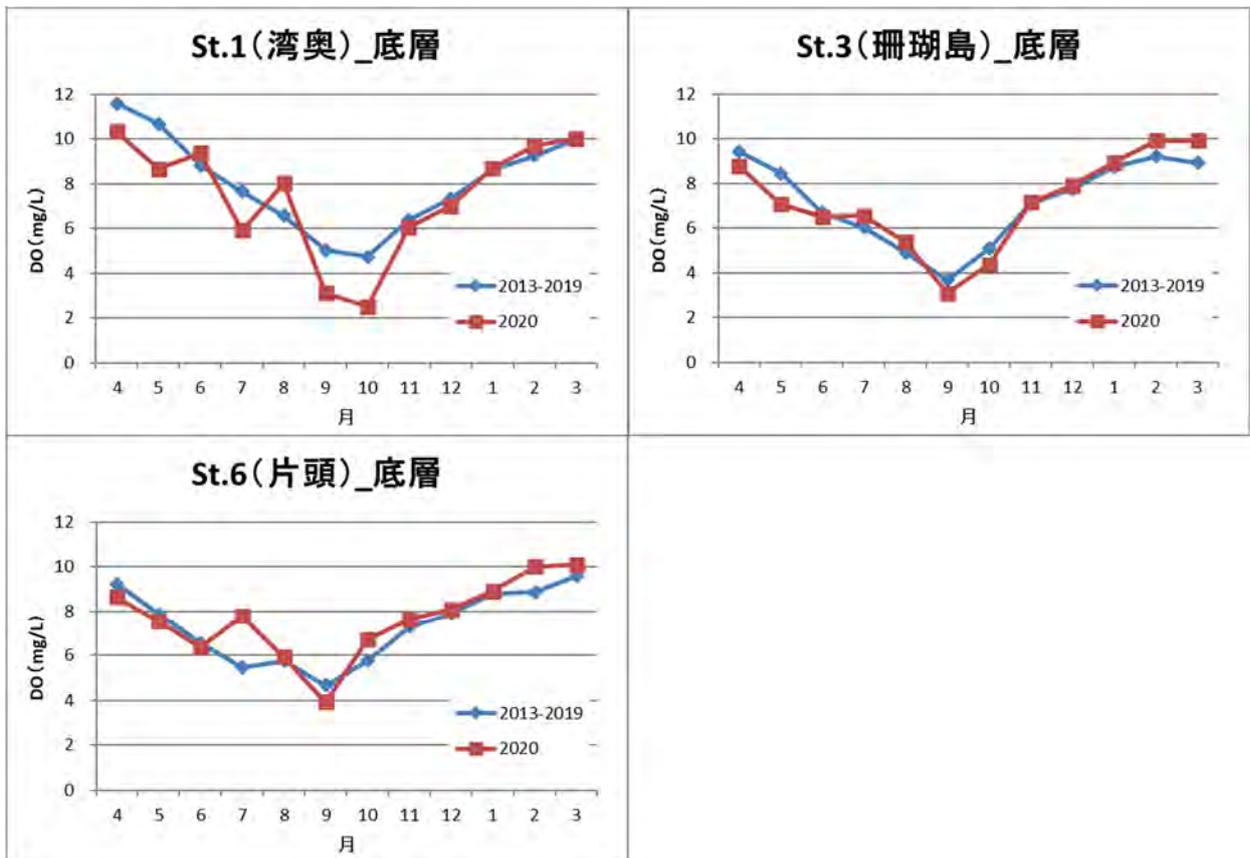


図6 大船渡湾底層 (海底1m上) の溶存酸素量の推移

2 底質調査結果

令和2年度の釜石湾及び大船渡湾の底質・底生生物調査結果を表2に示す。

釜石湾では、St. 1及び4においてCODが高く、水産用水基準の基準値（以下、「基準値」と表記）である20mg/dry・gより高かった。この2点では泥分率（粒径0.063mm未満の割合）も高かった。St. 4では、TSも基準値（0.2 mg/dry・g）を上回っており、底層の溶存酸素量は基準値（4.3mg/L以上）を下回った。いずれの定点も底生生物は多様に存在しており、多様性指数が極端に低い定点はなかった。

大船渡湾では、全ての定点でCODとTSのいずれも基準値を超えた。St. 1では底層の溶存酸素量が基準値を下回った。St. 2及び4では他の定点よりも底生生物の多様性指数は低くなった。

表2 令和2年度の釜石湾及び大船渡湾の底質・底生生物調査結果

湾名	定点番号	TS mg/dry・g	COD mg/dry・g	泥分率 %	底層DO mg/L	底生生物 多様性指数
釜石湾	1	0.07	34.1	75.7%	5.0	4.13
	2	0.05	5.1	10.6%	6.0	3.18
	3	0.06	8.7	24.2%	6.4	4.06
	4	0.25	42.1	83.9%	3.2	3.88
大船渡湾	1	1.10	46.9	70.0%	2.5	3.78
	2	2.68	55.9	73.1%	5.7	2.25
	3	1.24	47.3	63.5%	4.4	2.64
	4	0.29	31.6	54.1%	6.3	1.87
	5	0.25	38.0	70.4%	6.5	3.65
	6	1.16	40.9	75.6%	6.7	3.23

<今後の問題点>

両湾とも湾口防波堤が完工し湾内の漁場環境は今後も変化することが予想される。釜石湾は湾口防波堤の内側に水深が50mを超える漁場があり、そういった場所では底層の溶存酸素量が低くなりやすい。また、令和2年度から試験的に魚類養殖が行われており、湾内の有機物循環が変わる可能性がある。県南に位置する大船渡湾では黒潮系の海流の影響を受けやすく、夏季に高水温となることも多いことから、低酸素化が起きやすい。近年では地球温暖化による海水温の上昇も危惧されており、今後はこれまで以上に環境の変化を注視していく必要がある。

<次年度の具体的計画>

釜石湾及び大船渡湾で水質調査と底質・底生生物調査を継続する。

<結果の発表・活用状況等>

- 1 広報等
漁場環境情報（岩手県水産技術センターwebページ）
- 2 その他
結果を漁協等の関係者に報告した。